

# シリアスレジャー時代の生涯音楽学習

昭和女子大学 専任講師 歌川 光一

## 1. シリアスレジャーの時代

カナダの社会学者ロバート・ステピンスは、長期的に専門性を追求して楽しむ、アマチュア、趣味人、ボランティアの実践を、「シリアスレジャー」<sup>1</sup>と呼んでいる。杉山昂平によれば、シリアスレジャーは欧米圏ではポピュラーな研究トピックであるが、日本ではその受容が十分に進んでいない(杉山2019)。日本では、「趣味」「習い事・稽古事」(以下、「習い事」)に教育的・倫理的なニュアンスを含めながら用いる場合が多く、これらのレジャー活動にシリアスに取り組むことが前提とされやすいことも背景にあるのではないだろうか。しばしば日本の教育文化として賛美される「芸道論」などはその顕著な例だろう。

しかし、生涯学習・社会教育の存在も合わせみると、「余暇・遊び・文化/教育・学習」という二分法を乗り越える「シリアスレジャー」は、学术界に限らず使い勝手が良いようにも思える。今日の日本において再考されてもよいのは、むしろ「趣味」「習い事」のあり方やそれらに対する社会的なまなざしの方だという見方もできる。

本稿では、「趣味」「習い事」と教育・学習の関係をめぐる新動向をみていきたい。

## 2. 趣味の力点 「発表としての趣味」へ

### 2 - 1. 趣味活動と教育・文化行政

生涯学習論・社会教育学における趣味活動の位置づけは、余暇の一部として括られた上で、「あそび」から「教育・学習」に引き上げようとする志向性を反映したもの、もしくは、「お稽古事の伝統の表れ」であるとされてきた。時として舞台発表につながる趣味活動は、文化行政から見れば、経済的な効果も薄く対外的に cool でもないアマチュア活動の一形態であり、教育行政から見れば、公民館をはじめとする社会教育施設の有存在意義を量的に補ってくれる宿痾としての余暇活動とされてきた側面がある。その反面、趣味活動をめぐる教育行政・文化行政の管轄領域が曖昧になっており、なおかつ自治体によって制度が異なっているがゆえに、アマチュア活動家・学習者にとってさまざまな施設利用や助成

申請を行える意外な可能性も広がっている（拙稿 2015a）。

日本において「趣味」が、文化とも娯楽とも教育とも位置づけづらい理由には、歴史的経緯も関係している。「趣味」は、資本主義化が進展した日露戦争後から大正期頃までに、感性や審美眼（Taste）の涵養という教育学の対象としての概念から、（主に家庭）生活を彩る余技（Hobby）の保有という一般的意味へと変化し、西洋の高級文化と在来の娯楽の中間に設定された。この「趣味」の Hobby 化に伴って、それまでの「日常的に感性や審美眼（Taste）を涵養する」という意味における精神的な修養は、余技（Hobby）を一つから二つ、二つから三つへと増やすために「習い覚え、鍛錬する」という消費的な修養に変化してきた（拙著 2019）。

筆者は以前、生涯学習・社会教育実践として「趣味」をみる視点として、習い覚え、鍛錬する「修養として趣味」ではなく、発表それ自体を目的とする「発表する趣味」の視点を提示した（拙稿 2015b）。音楽についても、「修養としての趣味」と「発表としての趣味」をつなぐ事例がある。

## 2 - 2 . 大人のピアノ発表会&ピアノサークル

佐藤（2016）は、民間教室等で行われるピアノの発表会が、ピアノを習っている子どもの親が我が子の成長を確認する、あるいは子ども（親）同士のつきあいをはぐくむ「身内的空間」になっており、「単純に人前で演奏をしたい」と考える大人が疎外されやすい傾向を指摘した上で、それらの大人を対象とした発表会ビジネスを紹介している。例えば、大人のピアノ発表会&ピアノサークル事務局が主催している「合同ピアノ発表会」は、発表会がない教室や、子どもと同じ発表会で参加しにくい学習者等を想定して、発表会の参加のみでも受け付けている。また、「独学の方にこそ人前で弾く楽しさ・緊張感を味わってもらふ趣旨で、ピアノを習っていない場合も参加可能となっている（「大人のピアノ発表会&ピアノサークル」公式 HP（<http://tokyo-piano.com/> 最終アクセス：2020/1/10）。「（修養は積んでいなくとも）人前で披露・発表してみたい」という原初的な学習者の欲求が拾われているのがこれらの実践とも言える。

## 2 - 3 . 公民館講座を通じた島唄継承

豊山（2015）は奄美の島唄継承に関して、公民館講座、自主講座、地域島唄教室に注目し、生徒や上級者・講師・唄者への聞き取りから、地域島唄教室（稽古事教室）との関連における公民館講座の果たした役割と、文化的価値と経済的価値の両立という問題に関して考察している。島唄の学習動機は、島人としてのアイデンティティの確認、楽しみ・交流、島唄の音楽的要素や歌詞、奄美文化全体への関心先行者へのあこがれなどがあり、これらの動機は上級者・講師・唄者にもあてはまっているという。また、それらの活動によって県外へも島唄への理解者を増やすことが、自らの潜在的能力を発揮や自己実現欲求の充足につながり、継承活動への長期的なかかわりにつながっている。

これらの活動を支えているのが島唄の公民館講座、自主講座であるが、公民館講座にはコンクール出場者（将来の唄者候補性、島唄の供給層）を直接的に育成する機能はなく、生徒の島唄鑑賞の享受

能力を育成することで、島唄の需要層を厚くしている点は興味深い。また、行政施策である公民館講座と自主的取り組みである自主講座の関係については、公民館講座が自主講座の母体となっている例と、自主講座が公民館講座に先立つ住民の学習ニーズの受入れ機能をもっている例等が紹介されている。

また、島唄の供給側に着目してみると、奄美では、島唄で金儲けをしてはいけないという意識および共同体的規制が現在も存在し、生業と島唄を歌うことが相補的な関係にある唄者は少なくない一方で、プロの島唄歌手として直接に生計を立てている人はいないとされる。

豊山(2015)から示唆されるのは、島唄の技術やその証明としての資格・免許によってプロ/アマが分断されることなく、生徒の享受能力を高めることで、コミュニティ全体として島唄継承者としての共同性を高めている点にある。島唄歌手を生業とすることへの緩やかな忌避という形で現れる規範意識や、個々人の余技としての技量の蓄積それ自体が活動目的となっていない(コンクール出場それ自体が目的となっていない)ことから、公民館講座、自主講座、地域島唄教室の棲み分けが、教授者の技量や受講料の高低等によらない自然発生的なものになっている。

### 3. 習い事の変容

ICT 技術の進展により、偶発的に起こると考えられてきたインフォーマルラーニング<sup>2</sup>に対して、学習者自身の、そして学習者を支援する教育関係者の意識の深化が求められてきている。すなわち、「体験の蓄積」を「何となくの経験値の上昇」と捉えるのではなく、体験から得られた転用可能なスキルを学習者自身が認識する必要性が生じるとともに、教育者にはその適切な評価者として、また学習成果活用のためのコーディネーターとしての役割が求められることとなる。

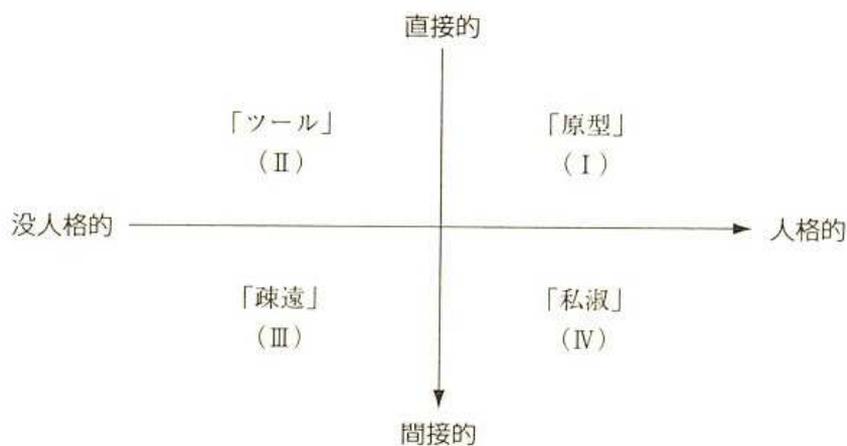
元来パフォーマンスである芸術文化、余暇活動においても、ICT の普及等が背景となって、インフォーマルラーニングの位置づけの重要性が増し始めている。

例えば、ピアノレッスンのような「習い事」の世界では、教授者が有資格者であり、実質上はフォーマルラーニングのような形態が採られる場合が多い。しかし、ICT 技術の進展により、学習者が、自身の好きな音楽のみならず、その演奏方法等も動画等を通じて幅広く収集することができる。またレッスン最中も、教授者のアドバイスをメモするだけでなく、教授者の演奏を手本として録画したり、自身の演奏姿をその場で確認することも可能である。家庭においても、特に自身が苦手とする技術等を割り出しておけば、繰り返し退屈な練習をする必要もなくなってくる。

深見友紀子氏のミュージック・ラボは、このような ICT 等を通じた児童・生徒のインフォーマルラーニングを前提としたレッスン教室である。1 回 40 分のレッスンにおいて、ベーシック教材と並行して、自分の希望するレパートリーを仕上げるが、レパートリー決定に際しては、インターネットなどを使って楽譜の有無を調べ、習熟度に合った楽譜に修正したり、新たに採譜・アレンジされる。ピアノ演奏の基礎力の育成に加え、学習、生活などのあらゆる面で生かせる思考力、集中力、即興力育成等も目的とし、コンクール出場やグレード取得は目標とせず、高いハードルをクリアした達成感や周りから賞賛されたという「成功体験」を得る機会としてピアノパーティを開催している(深見友紀子ミュージック・ラボ 公式ホームページ <http://www.ongakukyouiku.com/music-lab/index.html> 最終

アクセス 2020/1/10)。深見氏自身がまとめるように、このミュージック・ラボでは、児童生徒が選曲や曲の構成を自身で決定する過程において、教授者はメンターもしくは助言者の立場に立つこととなる(深見 2013)。

これらの ICT 技術の進展は、習い事の世界の徒弟関係にも変化を生じさせる。稲垣(2011)は、師弟関係を「人格的 没人格的」「直接的 間接的」を軸に、四象限で整理している(図を参照のこと)。深見氏のようなレッスン教室では、「お師匠様に弟子入りする」という「原型」タイプに加え、ネット上のプロを「私淑」したり、それに近づくために「ツール」として教室を活用する学習者の姿を見ることができる<sup>3</sup>。習い事の教師からすれば、学習者のニーズに合わせ、そのインフォーマルラーニングを的確にコーディネートしていく存在であることが求められるのである。



図：師弟関係の種類(稲垣 2011:261)

#### 4. 生涯音楽学習のシリアスレジャー的側面

ここまで、音楽に関する「趣味」「習い事」と教育・学習の事例から見てきた。「修養としての趣味」から「発表としての趣味」へという趣味活動の力点の置かれ方、また、「修養としての趣味」の典型とも言える習い事の方法やそこに含まれる師弟関係も転機を迎えつつある。

生涯音楽学習やそれを支える地域音楽コーディネーターの地域活動(久保田 2015 ほか)も、純然たる音楽の啓蒙活動というほどには高尚にし過ぎず、一方で個々人の趣味・娯楽の総体というほどに消費的でもないという点では、シリアスレジャーの先駆けと言える。「趣味」「習い事」の変容も見据え、地域の子どもや指導員自身のレジャーキャリアの発達という視点から実践を捉え直していくことも有益な作業の一つである。

## 【引用・参考文献】

- 深見友紀子 (2013) 「音楽教室における子どものインフォーマルラーニング」『日本教育工学会論文誌』37(3)、pp. 333-341.
- 稲垣恭子 (2011) 「アカデミック・コミュニティのゆくえ」稲垣恭子編『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社、pp.245-263.
- 久保田慶一 (2015) 「地域の音楽文化を創生する『生涯学習音楽指導員』」『社会教育』70(9)、pp. 32-34.
- OECD, 山形大学教育企画室 (監訳), 松田岳士 (訳) (2011) 『学習成果の認証と評価 働くための知識・スキル・能力の可視化』明石書店.
- 佐藤生実 (2016) 「アマチュア音楽家の楽しみ～大人の習い事と発表会～」『音楽文化の創造』(76) pp.20-23.
- Stebbins, R. A. (2015) *Serious Leisure: A Perspective for Our Time*. Transaction Publishers.
- 杉山昂平 (2019) 「レジャースタディーズにおけるシリアスレジャー研究の動向 日本での導入に向けて」『余暇ツーリズム学会誌』第6号、pp.73-82.
- 豊山宗洋 (2015) 「島唄継承における公民館講座の役割ならびに文化と経済の関係に関する一試論」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』(17) pp.1-26.
- 歌川光一 (2015a) 「社会教育・生涯学習行政と地域アマチュア芸術文化活動」宮入恭平編著『発表会文化論 アマチュアの表現活動を問う』青弓社、pp.17-37、67-90.
- (2015b) 「社会教育・生涯学習実践として『趣味』をみる視点 その歴史と展望」『社会教育』70(9) pp.20-25.
- (2016) 「インフォーマルラーニングを促す教育実践の動向 『学校教育/学校外教育』のフラット化を背景にして」『社会教育』71(8) pp.14-18.
- (2017) 「『たしなむ』環境を醸成する社会教育・生涯学習実践へ 音楽の活動事例から」『社会教育』72(7) pp.26-30.
- (2019) 『女子のたしなみの日本近代 音楽文化にみる「趣味」の受容』勁草書房。
- ・佐々木基裕 (2016) 「教育文化に関する歴史及び思想問題としての近現代日本の習い事～『嗜み』『師事』の社会的意味に焦点を当てて～」『音楽文化の創造』Vol.76、pp.15-19.
- 山内祐平 (2016) 「教育学とインフォーマル学習」山内祐平・山田政寛編『インフォーマル学習』ミネルヴァ書房。

## 【付記】

本稿の2、3は、拙稿(2016、2017)の一部を再構成したものである。本稿の執筆にあたり、科学研究費補助金(基盤研究C、2019～2021年度)「近代初期日本における美術・文化愛好者の再生産過程 学校外での教習活動に着目して」(早川陽研究代表、19K00139)の助成を受けた。

## 【注】

- <sup>1</sup> シリアスレジャーは、「アマチュア、趣味人、ボランティアによる活動で、彼・彼女らにとって大変重要で面白く、充足をもたらすものであるために、典型的な場合として、専門的なスキルや知識、経験の獲得と表現を中心にしたレジャーキャリアを歩み始めるもの」(Stebbins 2015: 5)と定義される。
- <sup>2</sup> OECDは、フォーマルラーニングが「組織化され、構造化された環境において発生し、明らかに(目標設定、時間、リソースの観点から)学習としてデザインされる学習」であるのに対し、インフォーマルラーニングは「仕事、家庭生活、余暇に関連した日常の活動の結果としての学習」であると定義している(OECDほか=松田2011)。山内祐平によれば、例えば、旅行をしている中で様々な事件が起こり、その対応の中で知識やスキルが身に付く場合、インフォーマルラーニングととらえることができる(山内2016: 8)。
- <sup>3</sup> 音楽界における「師事」の特殊性については、歌川・佐々木(2016)に詳しい。